
 学 会 記 事

第53回新潟高血圧談話会

日 時 平成24年11月16日(金)
午後7時～
会 場 新潟グランドホテル 3階
「悠久」

I. 一般演題

腎機能障害と検尿異常で経過観察中に尿蛋白の増加を認めた摂食障害の1例

渡辺 博文・大澤 豊・吉田 一浩*
伊藤 由美*・今井 直史*・後藤 眞*
霜鳥 孝・成田 一衛*

新潟臨港病院内科
新潟大学医歯学総合病院第二内科*

症例は70歳台, 女性。

【経過】X年から近医への定期通院を開始した。左尿管結石, 腎結石があり, 時々血尿や排石がみられていた。高血圧は認めず, 脂質低下薬, 抗不安薬が処方されていた。eGFRは60 ml/min/1.73m²未満であり, X+3年から1年毎に当院CKD外来への通院を開始した。CCr47.4ml/min, 尿蛋白51 mg/日であったが, X+5年にCCr56.7ml/min, 尿蛋白572 mg/日と尿蛋白の増悪を認め, X+6年に腎生検を施行した。光顕では糸球体35個中, 全節性硬化を16個に認め, IFは陰性, 電顕では菲薄基底膜を認めた。この入院中, 食事摂取は1割程度であり, 聴取により, 摂食障害の既往と, 高血圧の既往が判明した。

【考察】摂食障害による腎障害出現の報告もあり, 本症例は, 以前の高血圧状態に伴う腎硬化症の病態に加え, 摂食障害による腎機能への影響も考えられたため, 文献的考察を踏まえて報告する。

II. 特別講演

高血圧と腎保護

～セルフケアのすすめ～

東北大学大学院医学系研究科
腎高血圧内分泌学分野

森 建文

糸球体腎炎による末期腎不全患者が減っている一方, 数々の降圧薬が開発されているにも関わらず, 依然高血圧性腎硬化症による透析患者は増加している。

アンジオテンシンⅡ昇圧ラットにおける腎障害は皮質表在ネフロンがアンジオテンシンⅡによる障害が優位であったのに対し傍髄質ネフロンは腎灌流圧が優位であった。一方, 食塩感受性高血圧と腎機能障害を呈するDahl食塩感受性高血圧ラットでは皮質表在ネフロン, 傍髄質ネフロンともに腎灌流圧に依存する腎障害が優位であった。

このように血圧コントロールが腎保護には重要でありすぐれた降圧剤の開発により, 十分な降圧が可能になってきた。さらに降圧剤には腎保護能力に優れたものが存在し, 腎保護が可能になっている。しかしながら, 生活習慣の改善とともに適切な時期に適切な治療を受けなければ, 十分な腎保護は得られない。また, 降圧剤の使用にはその薬剤の特性を理解し, 安全に使用する必要がある。

そのためには自分の病態や生活習慣, 治療等を理解できセルフケアを高める患者教育が必要である。腎障害をもたない高血圧患者だけでなく, 腹膜透析患者のような末期腎不全患者でも血圧コントロールと残腎機能保持は生命予後に対し重要な因子である。セルフケアを重視した腎不全教育を推進することにより, 腎不全患者のコンプライアンスを高めることができる。